無題

夏目漱石

私は此學校は初めてでエー来るのは初めてだけれども、御依頼を受けたのは決して初めてではありません。二三年前、田中さんから頼まれたのです。その頃頼みに来て下さった方はもう御卒業なさったでせう。それ以来十数回の御依頼を受けましたが、みんな御斷りしました。斷るのが面白いからではなく、已むを得ないからで、此已むを得ない事が度重なって御気の毒なので、その結果今日やって来ました。言はゞ根くらべで根がつきて出て来たやうなしまつであります。だから面白い御話も出来兼ねます。今からとにかく一時間ばかり御話します。それ故、題なんかありません。

私は専門があなた方とは全然違ってゐます。こんな機會でなければ顔を合はすことはありませんが、是でも私は工業の部門に屬する専門家にならうとした事がありました。私は建築家にならうと思ったのです。何故って云ふ様な問題ではない。けれども序だから話します。

まだ子供のとき、財産がなかったので、一人で食はなければならないと云ふ事は知ってゐました。忙がしくなく時間づくめでなくて飯が食へると云ふ事について非常に考へました。然し立派な技術を持ってさへゐれば、變人でも頑固でも人が頼むだらうと思ひました。

佐々木東洋と云ふ醫者があります。此醫者が大へんな變人で、患者をまるで玩具か人形の様に扱ふ、愛嬌のない人です。夫ではやらないかと云へば不思議な程はやって、門前市をなす有様です。あんな無愛想な人があれ丈はやるのは矢張り技術があるからだと思ひました。夫だから建築家になったら、私も門前市をなすだらうと思ひました。丁度夫は高等學校時分の事で、親友に米山保三郎と云ふ人があって、此人は夭折しましたが、此人が私に説諭しました。セント・ポールズの様な家は我國にははやらない。下らない家を建てるより文學者になれと云ひました。當人が文學者になれと云ったのはよほどの自信があったからでせう。私は夫で建築家になる事をふっつり思ひ止まりました。私の考は金をとって、門前市をなして、頑固で、變人で、と云ふのでしたけれども、米山は私よりは大變えらい様な気がした。二人くらべると私が如何にも小ぽけな様に思はれたので、今迄の考を止めてしまったのです。

そして文學者になりました。その結果は分りません。恐らく死ぬまで分らないでせう。夫で私とあなた方とは専門が違ふ事になったのですが、此會は文藝の會で、ベルグソンなども出る様ですから、多少は共通してゐる處もある様にも思はれます。夫でまあ私も御話をするといふ様な譯であります。（以下略）

大正三年一月十七日東京高等工業高校に於て

（漱石全集　第三十三巻、昭和三十二年、岩波書店）